



龍に関する研究の現状について

著者	周 正律
雑誌名	文化交渉 : Journal of the Graduate School of East Asian Cultures : 東アジア文化研究科院生論集
巻	4
ページ	251-262
発行年	2015-02-28
その他のタイトル	The precedent recognition and studies of Long (龍)
URL	http://hdl.handle.net/10112/9943

龍に関する研究の現状について

周 正 律

The precedent recognition and studies of Long (龍)

ZHOU Zhenglv

Abstract

This paper focuses on the precedent studies of Chinese Long (龍) and those derivative legends and cultures about it, which spread all over East Asia and even have a global influence nowadays. There are already many researches talking about the origin of Long and its spread, or about those pictures of Long picked up from excavated articles. But of these studies there are still some methodological problems such as a misunderstood starting point of what we think the Long is today, and also the easy means of combining the pictures and the historical texts.

This paper shall attempt to discover a new method to find out the origin of the recognition of today's Long and those derivative legends and cultures about it.

Key words : 龍、起源説、図像資料、文献資料、秦漢時代

はじめに

中国・朝鮮半島・日本などの現在の東アジア諸地域には、「龍」に対する共通のイメージが存在する。「龍」と龍にまつわる諸文化（これを本稿では「龍文化」と呼ぶ）は、最初中国で発生し、東アジア諸地域に伝播・受容されたと考えられる。周知のように、龍のイメージは中国のみならず、古代の朝鮮半島や日本の墓葬、刀・鎧や、さらには日常生活用品にも用いられており、これらの龍と中国古代の龍との関連性を探る試みも枚挙にいとまがない。龍は東アジア文化の相互交渉を考えるうえでの重要な要素の一つとなっているのである。

史料には、龍のモチーフとイメージの出現頻度は非常に高い。数量的には、漢唐及びそれ以前は図像と器物のほうが多いが、宋代より下ると、類書や、詩文や、小説や、絵画技法のテキストなどによくみられるように、図像だけではなく、文献の中にも龍の外形と性格を記すものが一気に増えた。

龍は想像上のものであり、その姿と性格は人々の想像によって変わる。そのため、歴史上の龍の形は多種多様であり、その性格も変化し続けている。考古学的に見ると、文物に描かれている龍の形は一貫性を持ちながらも、時代によって変化する部分がある。その龍の豊富多彩な姿と性格は、いつも人々の好奇心を引き起こしている。

現在でも、各分野における龍についての研究は盛んである。しかし、後文にも述べるが、龍の起源と時代的特徴を語るものが主流であるため、仮説と概説が占める割合が大きい。また、それぞれの研究分野上の都合があるため、龍に関する図像資料と文献史料の引用には不備が生じる。それに、これまでの研究から見れば、清末以降における龍のイメージへの理解は研究者たちに強い影響力を持っている。近代史上における龍の研究であるなら、まだそのような龍のイメージと関連性があるが、しかし明清以前、さらには漢唐以前の龍は、はたして今日われわれが理解している龍と同じものであろうか。それはまさにいままでの龍についての議論における最も重大な問題点である。

今日の中国において、一般的には自らを「龍的伝人」と称し、自分たちを龍の子孫とする。また、多くの研究者も龍を中国人或いは「華夏文明」のトーテム¹⁾と認識している。しかし、歴史上に現れたイメージによれば、龍が中国人の共通の祖先のシンボルと確信できる証拠はどこにもない。それは恐らく秦漢時代以降の各統一王朝の統治によって生じた龍への敬意と服従感を現代社会の人々が再編纂したものであろう。

漢代において、龍はその威厳と力がある外形と瑞祥としての性格、または古代天文学におけ

1) 動物や植物などのモチーフとイメージをもって、それを自分たちのグループや部落の祖先とシンボルにするという旧石器時代から始まった現象があるとされる。そのシンボルを文化人類学的にトーテムと呼称される。

る重要な位置づけにより、王室の伝説上の祖先とされた。最初に正史に記された記述は以下のようである。

高祖、沛豊邑中陽里人也、姓劉氏。母媪嘗息大澤之陂、夢與神遇。是時雷電晦冥、父太公往視、則見交龍於上。已而有娠、遂產高祖。高祖為人、隆準而龍顏、美須髯、左股有七十二黑子。²⁾

これは漢の高祖の劉邦の出生についての伝説である。あくまで、後漢時代の王室にとって、民を君臨する最高統治者である皇帝の祖先は、龍と神秘的な結びつきがあると考えられるだけである。それ以降の幾つか時代にも、龍と王室との繋がりが強まったり弱まったりしていた。元代に初めて龍の爪の数と階級の関連性が一時的に定められた³⁾。異民族王朝である元代は、権力の象徴である龍と鳳をタブーとし、

服色等第：仁宗延祐元年冬十有二月、定服色等第、詔曰「比年以來、所在士民、靡麗相尚、尊卑混淆、僭禮費財、朕所不取。貴賤有章、益明國制、儉奢中節、可阜民財。」命中書省定立服色等第於後。一、蒙古人不在禁限、及見當怯薛諸色人等、亦不在禁限、惟不許服龍鳳文。龍謂五爪二角者。一、職官除龍鳳文外……一、器皿、謂茶酒器。除鍛造龍鳳文不得使用外、……一、帳幕、除不得用赭黃龍鳳文外、……一、車輿、除不得用龍鳳文外、……⁴⁾

とあるように、龍は五爪二角と定め、また「比年以來、所在士民、靡麗相尚、尊卑混淆、僭禮費財」という状況を変え、上下尊卑の関係を明白にするために、そのような龍に関する一連の禁令が出された。しかし明朝になると、その禁令はゆるくなり、

永樂十五年、其國東王巴都葛叭哈刺、西王麻哈刺叱葛刺麻丁、峒王妻叭都葛巴刺卜並率其家屬頭目凡三百四十餘人、浮海朝貢、進金鏤表文、獻珍珠、寶石、玳瑁諸物。禮之若滿刺加、尋並封為國王。賜印誥、襲衣、冠帶及鞍馬、儀仗器物、其從者亦賜冠帶有差。居二十七日、三王辭歸。各賜玉帶一、黃金百、白金二千、羅錦文綺二百、帛三百、鈔萬錠、錢二千緡、金繡蟒龍、麒麟衣各一。⁵⁾

とあるように、永樂帝が藩国の王に「金繡蟒龍」という紋様の服を賜った。明代には龍の外形

2) 『史記』卷八「高祖本紀第八」。

3) 宮崎市定「龍の爪は何本か」(『中国文明論集』岩波書店、1995年)、341-345頁。

4) 『元史』卷七十八、「志」第二十八、輿服一、儀衛附・冕服・服色等第。

5) 『明史』卷三百二十五 列傳第二百十三 外國六 蘇祿。

と階級の関係に関する規定と禁令は依然として存在するが、少なくともそれについての基準が時代によって変化するものだと考えられる。そして、清代では、外交のために、中国歴史上初めての国旗が作られた。それは「黄底龍紋」のものであった⁶⁾。清王室は龍を選らんで国の象徴にした。そこから新聞などの媒介を通じて、全国中ないし諸外国の目にも、中国のシンボルは龍である、というイメージが現れ始めたと思われる。

戦前と中国が成立した直後の学界では、前述のような前代の思想の世間への影響と聞一多氏の龍についての論説⁷⁾が広く受け入れられ、基本的に「龍は華夏文明ないし中国人全体のテーマである」という考え方が漠然と信じられていた。けれども、その後の新しい考古発掘情報などの分析により、一部の研究者は聞氏の言説と龍についての研究を省みるようになり、特に日本をはじめの諸外国の視点を受け入れようとする努力によって、龍についての文献史料と図像史料などの分析研究が盛んに行われていた。本稿はその龍についての先行研究を分析し、現状を明らかにして、これから龍についての議論の行方を探るためのものである。

一、龍の起源と龍文化の変遷についての先行研究

1. 龍の起源説について

これまでの龍についての先行研究は、中国における龍の起源及び龍文化の発生と変遷に関心が集中し、多くの試みがなされてきた。

現在公認された中国最初の龍といえるのは、今より6000年くらい以前の河南省濮陽縣西水坡遺跡から出土された貝の殻で作られた龍である。この「貝龍」について何星亮氏は「蚌殼龍與我們今天所塑的龍基本相似，它是迄今發現的最早的有肢、有爪的龍，堪稱“華夏第一龍”。」と述べた⁸⁾。そのほかにも、今のわれわれが認識している龍とかなり近い形が見える新石器時代の出土物が多い。たとえば、紅山文化の玉龍もその一つである⁹⁾。同時代の文献史料がないため、それらの「龍」が果たして龍であるかどうかについては証明しようもない。ただ、殷周時代の青銅器からうかがえるように、少なくとも龍、或いは龍の類の姿がアジア大陸東部に出現したのは部落集団生活の時期、もしくはそれよりも少し前であるということは間違いのないであろう。

近代になると、龍の起源については、主にワニなど実在の動物に龍が由来するという「動物

6) 小野寺史郎「中国最初の国旗」(『中国研究月報』57(10)、社団法人中国研究所、2003年)21-31頁。

7) 聞一多「伏羲考」(『聞一多全集』上海書店影印版、開明書店、1948年)、2-72頁。

8) 何星亮「“華夏第一龍”探析」(『東南文化』1993年第三期(總第97期))、41-53頁。

9) 孫守道「三星他拉紅山文化玉龍考」(『文物』1984年第6期)、7-10頁。

起源説¹⁰⁾と、木¹¹⁾・河川¹²⁾・虹¹³⁾・雷¹⁴⁾などの自然物と自然現象を象徴するものとして龍の出現を捉える「自然・現象起源説」の二種類が展開されている。

龍の動物起源説について、何新氏は、甲骨文字の検討及び龍に関する史料とワニの生物学的情報の対照研究によって、比較的詳細な龍のワニ起源説を述べた¹⁵⁾。

一方、「自然・現象起源説」を最初に提示をしたのは、恐らく後漢時代の『論衡』であろう。その中に、王充は龍と雷の関係について言及しているが、しかし全般的には龍の起源について詳しい検討はしなかった。管見の限り、その説について明確な考えを提示したのは李均洋氏である。彼は言語学の視点から、日中の言葉の比較によって両国の雷神信仰を検討し、雷神信仰から龍神信仰への転換と、龍信仰の源を探った¹⁶⁾。

しかし、上述の二説よりも、今日大きな影響力をもつのは、聞一多氏が提唱した「トーテム合併説」である。聞氏によれば、「它是一种图腾 (Totem)，並且是只存在於图腾中而不存在於生物界中的一种虚拟的生物，因為它是許多不同的图腾糅合成的一种綜合體¹⁷⁾、つまり、龍は上古時代における幾つかの部落の象徴である動物が融合したものであり、実在しない生物である。その説が現れた以前にも、龍の原型について仮説と推測を提起した研究者はいたが、しかし史料を挙げ、詳細に論証したのは聞氏がはじめてであろう。

聞氏のトーテム合併起源説について、それを支持する人は今まで多数きいたが、それに疑問を持っている人も現れた¹⁸⁾。やがて、龍が中国人共通のシンボルであるという説に疑問を呈する研究も出た¹⁹⁾。近年でも、その議論を反省する研究は陸続と出されている²⁰⁾。その一方で、こうした議論から脱して、他の角度から龍への信仰の起源を探索する研究があらわれた。たとえば、吉成名氏は民俗史学の角度から、龍への崇拜心理の出現と伝承を説明しようとした²¹⁾。また日本での伝承について、吉岡郁夫氏は、龍と龍巻・台風との関連性から解き明かそうと試みた²²⁾。

以上の先行研究によれば、龍の起源説をめぐる議論の前提は、基本的には殷周時代よりも以

10) 章炳麟「説龍」(『華國』1924年第11期)、章氏は龍の起源がワニであると提唱した。

11) 尹榮方「龍為樹神説—兼論龍之原型是松」(『學術月刊』1989年7期)、39-45頁。

12) 何根海「龍的初始原型為河川説—兼論龍神話的原始文化事象」(『中國文化研究』1999年第2期)、110-116頁。

13) 胡昌建「論中國龍神虎神的起源」(『中國文物報』1988年6月24日第3版)。

14) 朱天順『中國古代宗教初探』(上海人民出版社、1982年)、102-103頁。

15) 何新『龍：神話與真相』(山海人民出版社、1990年)。

16) 李均洋『雷神・龍神思想と信仰—日・中言語文化の比較研究』(明石書店、2001年)。

17) 聞一多「伏羲考」(『聞一多全集』上海書店影印版、開明書店、1948年、2-72頁)、26頁参照。

18) 施愛東「龍與圖騰的耦合：學術救亡的知識產生」(『民族藝術』2011年4期、6-23頁)。

19) 王先勝「龍不是中華民族的圖騰」(『瀋陽職業技術學院院報』2012年2月、1-11頁)。

20) 徐永安「“龍崇拜起源”研究述評」(『長江大學學報(社會科學版)』2007年3期、11-22頁)。

21) 吉成名「龍崇拜起源新論」(『民俗研究』2000年1期、69-83頁)。

22) 吉岡郁夫「龍の伝承、とくに東海地方の龍巻と台風について」(『比較民俗研究』(20)、筑波大学比較民俗研究会、2005年10月、77-84頁)。

前の龍であることがわかる。したがって、先行研究が提示した龍の図像資料も基本的には上述の時代のものである。しかしそのような図像の分析のために引用される文献については、殷周時代及びその以前の史料が欠けているため、いずれの先行研究にも漢代及びその以降のものが用いられている。よって、先行研究には、時代的な矛盾が生じることが予想される。こうした事実は、龍の起源説が一つに定まらない最大の原因といっても過言はないであろう。

2. 龍文化の変遷について

龍の起源についての研究は他にも数多くあるが、しかしそのいずれも、文献史料が不足し、同時代の図像資料もあいまいなものが多いため、今まではっきりとした結論に辿り着いていない。そこで、後の研究者たちは龍の起源を探ることよりも、龍文化の発生と龍の性格を探索する方向に転換した。

林巳奈夫氏は、中国古代の青銅器、画像石、帛画などにみえる龍の図像を資料として、様々な龍の姿を網羅的に例示した研究を行った²³⁾。また、龍に対する信仰や龍が象徴するものについて、何新亮氏は龍崇拜に歴史的発展段階があったことを示そうとした。何氏は、龍の概念を歴史的に変化するものとして認識し、その概念は主にトーテムと神という二つであり、また、その二つの概念が前後に発生し、相互整合しつつ、各自の展開を成し遂げたと述べた²⁴⁾。それを踏まえて、後に何氏は中国龍文化の発展には四つの段階があるという「龍文化発展段階説」を提示した²⁵⁾。他に、秦漢時代以前の龍について、王震中氏が図像資料において、龍の足の有無に基づいて二つに分類して検討し、龍の原型がワニと蛇であり、その原型が後に自然現象の雷と結ばれ、「華夏族の農業の神」になったと述べた²⁶⁾。

さらに、龍文化の発生と伝播について、安田喜憲氏は環境地理学の視点から、新石器時代を中心に、中国文化の「南北対立構造」という背景を提示し、龍は中国東北部の森で誕生し、北方の畑作牧畜文明と南方の稲作漁撈文明との融合した産物であると述べた²⁷⁾。それを引き継いで、李国棟氏は、主に文献史料を利用し、龍と現実に存在するいくつかの動物の関係を検討することによって、龍文化の北方における出自を明白に述べ、中国における龍文化の放射伝播の軌跡を明らかにした²⁸⁾。また、南方に伝わった龍文化は、「騰蛇」や「委蛇」など土着文化の影響によって変容し、南方地域における独自の龍文化が生まれたとする考えも示された²⁹⁾。

龍の起源説から龍文化の発生と変遷に、という研究方向の転換は、龍の研究に新たな可能性

23) 林巳奈夫『龍の話 図像から解く謎』(中公新書、1993年)。

24) 何新亮「龍：圖騰—神」(『民族研究』1993年第2期、38-46頁)。

25) 何新亮「中國龍文化的發展階段」(『雲南社會科學』1999年第6期、57-64頁)。

26) 王震中「龍の原型」西山尚志訳(『大東文化大学漢学会誌刊』47号、2008年3月、1-15頁)。

27) 安田喜憲「龍の文明史」(『龍の文明史』安田喜憲編、八坂書房、2006年、17-62頁)。

28) 李国棟「龍と鯉・馬・牛・羊・鹿・犬の関係」(『龍の文明史』安田喜憲編、八坂書房、2006年、161-190頁)。

29) 張正明『楚文化志』(湖北人民出版社、1988年)。

を与えた。けれども、起源説の研究の影響はまだ強いと考えられ、龍文化の研究にも、時代的に幅が広く展開されるときに史料の時代性への配慮が不足であることと、図像と文献史料の安易な結合という、二つの問題がなお見られる。

二、文献史料と図像史料の分析についての先行研究

起源説をめぐる論争は結論が出なかった。後に、その議論を引き継ぎ、龍の起源を探究する研究も存在する一方で、その論争の泥沼から脱却し、龍と古代社会の現実との繋がりを重視することで、当時における人々の龍についての認識を明らかにしようとする新たな研究視点を持つ研究者も現れた。龍にまつわる問題の解明に使用された資料は概ね三種類である。それは正史と龍に関する伝説、そして図像資料である。

龍の起源とその伝播と伝承に関する研究は、基本的に現在の龍のイメージを出発点としたものである。史料の引用について、特に概説的な研究は、基本的に時代を遠慮せず、すべての時代の龍を現在の龍と同一視していた。しかし、龍のイメージは、何星亮氏が述べたように、歴史的に変化するものである。そのため、龍に関する史料も、その「つねに変化する」という視点から検討しなおす必要があると考えられる。

1. 龍の定型化

前述のとおり、林巳奈夫氏は戦国から秦漢時代、さらには上古時代まで遡って、龍に関する図像を分析することで龍の性格を検討した。管見の限り、それは恐らく、時代が確定できる図像によって全般的に龍を検討する最初かつ唯一の試みである。林氏が述べたように、先秦時代の中国では、龍のイメージは地域によって違い、その差異は秦漢時代の王朝の統一によって凝縮・統合されたと考えられる。現在では一目瞭然の「龍の性格も図像も、この時代にはすでに定型化していたのである」³⁰⁾。龍とは、図像に現れる龍の外見と、文献に記された龍の性格、という二つの部分で構成されると考えられ、また、そのいずれも漢代である程度定型化していたというのである。

漢代以前には、紅山文化の「C型玉龍」や、殷周時代の青銅器などに見えるように、多様な形の龍が数多くあった。それらの龍はわれわれが現在認識している龍のイメージには近いが、しかし、足の有無や、鱗の有無、また角の形と体の形などのような違いも存在する。漢代に至ると、墓の裝飾壁画、画像石と石刻、または日常に使われる木器、漆器と屏風などには、今日と基本的に変わらない龍の姿が現れる。「この漢時代の龍は図像の形で無数に残り、その姿はわれわれの知る龍と大同小異である」³¹⁾。しかし、林氏は「龍の定型化」について提示したが、そ

30) 林巳奈夫『龍の話 図像から解く謎』（中公新書、1993年）1頁参照。

31) 同上。

の形と性格の分析に留まり、それ以上、たとえば、それらの龍の形と性格が形成された経緯や、後の展開などについては論じていない。現在広く認識されている龍について、その定型の形成、伝承と変遷などには、未だ不明瞭なところが多いのである。

2. 龍の図像の分析について

龍の形については、近年の美術史学と考古学分野ではしばしば討論されている。近代において、龍の紋様や彫刻などについて最初に関心を持ち始めたのは、日本の動物学者³²⁾と建築学者³³⁾である。それは主に寺や神社の装飾としての龍紋³⁴⁾と龍柱³⁵⁾についての紹介と考察である。

中国では、考古学における器物分析によって、龍紋についての関心があらわれはじめた³⁶⁾。その器物とは主に玉器である³⁷⁾。こうした出土器物の龍紋についての関心は、のちに日本にも影響をもたらしたようである³⁸⁾。

上述の研究成果は啓発的ではあるが、一つの器物に集中する傾向が強く、また、概説的叙述³⁹⁾にとどまっている。当時は資料の限界があり、図像と文献史料の結合の適否や、龍文化の時代的異同等への考慮に不備なところも多数ある。しかし、龍の紋様について、このような課題は、半世紀をも越えた近年までも続いている⁴⁰⁾。

3. 南北における龍文化

一方、龍の起源説についての研究の中には、先秦時代から秦漢までの文献史料を引用して、文字学や、歴史学や、環境学などの視点から龍の性格に関してよく検討したものが多い。漢代の文献史料によると、われわれが今認識している龍の各特性はすでに揃っている。それはまさに林氏が指摘したように、秦漢王朝の統一が龍に対して重大な影響を及ぼしたからであろう。また、李国棟氏は「北方的な龍と南方的な龍がもう一度統合して、今のような龍に変わったのであろう」と指摘するように⁴¹⁾、もし前述のとおり、龍の定型化が秦漢時代で行われたとすれ

32) 渡辺盈「佐太神社ノ龍蛇」(『動物学雑誌』第27号、1891年1月、46-48頁)。

33) 飯田須賀斯「大崎八幡及び瑞巖寺の龍虎の欄間」(『日本建築學會研究報告』(24)、1953年10月、29-30頁)。

34) 辻合喜代太郎「龍文様について 建築装飾としての意味」(『日本建築學會研究報告』(30)、1955年5月、1-4頁)。

35) 西村貞雄「龍柱について」(『琉球大学教育学部紀要』第一部・第二部(33)、1988年9月、135-160頁)。

36) 張秉午、邢捷「古文物紋飾中龍的演變與斷代初探」(『文物』1984年1期、75-80頁)。

37) 常素霞「古玉器中龍紋的演變」(『文物春秋』1989年10月、12頁と46-52頁)。

38) 伊東徹夫「定窯白磁の龍文について—法興寺遺跡出土資料をめぐって」(『大手前女子大学論集』第21号、1987年、85-104頁)。

39) 羅二虎「試論古代墓葬中龍形象的演變」(『四川大學學報(哲學社會科學版)』1986年3月、103-113頁)。

40) 劉曉暢「試論曾侯乙墓墓主內棺龍紋」(『湖北第二師範學院院報』2013年3月、69-72頁)。

邱向軍「簡析玉器龍紋的發展軌跡」(『中原文物』2013年4月、101-108頁)。

41) 李國棟「龍と鯉・馬・牛・羊・鹿・犬の關係」(『龍の文明史』安田喜憲編、八坂書房、2006年、161-190頁)。

ば、南北の龍から現在の龍に変わる過程も漢代から始まったと考えられる。

4. 漢代の龍

漢代の龍についての研究は、前述の龍の起源、伝播と伝承における概説的な論述と、考古学における漢代の出土物の分析との二種類がある。とくに漢代の墓葬によく見られる銅鏡⁴²⁾、帛画⁴³⁾、画像石⁴⁴⁾と漆器⁴⁵⁾の装飾紋様としての龍が議論の中心とされている。これによれば、漢代には現在われわれが認識している龍の外見と性格のすべての要素が基本的に出揃った。しかし、やはり当時の龍は、現在の龍文化における統合された龍のイメージとは異なる部分が見られる。その異なる部分はどのように消滅したか、そして漢代以降の龍のイメージの統合はいかに行われて今日の龍文化にまとめられたのか、これらの疑問について、まだ未解決の課題は多い。

5. 龍への認識の変遷とその原因

近年、龍とトーテムや龍と王権、龍と山河風雨など、龍と龍にまつわる諸文化は普遍的に受容れている。寺や庭園、石碑など、ところどころに「龍」の姿が見られる。しかし、漢代の龍と対照してみると、現在われわれが慣れ親しんでいるそれらの「龍」は、はたして「龍」であろうか。つまり、前代の人々が認識していた「龍」と現在われわれが認識している「龍」とは、どのような相違をもち、いかにして結びつくのであろうか。それは龍の研究には回避できない問題であろう。たとえば、「龍の息子」の伝説がある。

俗傳龍生九子、不成龍、各有所好。弘治中、御書小帖、以問內閣、李文正據羅玘劉績之言、具疏以對、今影響記之。一曰鼯鼠、好負重、今碑下趺是也。二曰螭吻、好望、今屋上獸頭是也。三曰蒲牢、好吼、今鐘上紐是也。四曰狴犴、有威力、故立於獄門。五曰饕餮、好飲食、故立於鼎蓋。六曰夔龍、好水、故立於橋柱。七曰睚眦、好殺、故立於刀環。八曰狻猊、好煙火、故立於香爐。九曰椒圖、好閉、故立於門鋪。⁴⁶⁾

明朝中葉である弘治年代に、皇帝が「龍の息子」の伝説について内閣の大臣たちに尋ねた。すると、李文正という大臣は羅玘と劉績という二人の大臣に聞き、皇帝に返答した。

また、清の時代になると、

42) 武耕「漢代博局紋鏡の圖像象徵意義」(『蘇州教育學院學報』第29卷第2期、2012年4月、74-77頁)。

43) 呂瑞珍「長沙馬王堆一號漢墓帛畫」(『歷史教學』1983年第11期、49-50頁)。

44) 李立「漢墓神畫的研究」(上海古籍出版社、2004年12月)、「第一章 漢墓神畫龍壁畫像神話藝術分析」、1-45頁参照。

45) 張啟彬「升仙之途與飛升工具——以馬王堆一號墓朱地彩繪棺為例考察靈物圖像的來源與文化」(『榮寶齋』2013年8期、56-67頁)。

46) 『升庵外集』卷九五。

俗傳龍子九種、各有所好。一曰鼯鼠、形似龜、好負重、今石碑下龜趺是也。二曰螭吻、形似曾、性好望、今屋上獸頭是也。三曰蒲牢、形似龍而小、性好叫吼、今鐘上級星也。四曰狴犴、似虎有威力、故立於獄門。五曰饕餮、好飲食、故立於鼎蓋。六曰蚣蝱、性好水、故立於橋柱。七曰睚眦、性好殺、故立於刀環。八曰金猊、形似獅、似好煙火、故立於香爐。九曰椒圖、形似螺蚌、性好閉、故立於門鋪。⁴⁷⁾

とあるように、龍の息子の伝説について、明の時代と類似する伝承が残されている。しかし、龍の息子の順番や、名前や、特徴などには、やはり多少の相違が見られる。従って、その伝説では、龍であるかどうかという判断において一定の基準はあるが、それはかなり幅の広いものであると考えられる。

さらに、李文正よりすこし前の明代に、陸容という人がすでにそのような装飾としての怪獣を考証している。それについて彼は以下のように記している。

古諸器物異名。鼯鼠其形似龜、性好負重、故用載石碑。螭吻其形似獸、性好望、故立屋角上。徒勞其形似龍而小、性好吼叫、有神力、故懸于鐘上。憲章其形似獸有威、性好囚、故立於獄門上。饕餮性好水、故立橋所。蜥蜴形似獸、鬼頭、性好腥、故用於刀柄上。其形似龍、性好風雨、故用於殿脊上。螭虎其形似龍、性好文彩、故立於碑文上。金猊其形似獅子、性好生煙、故立于香爐蓋上。椒圖其形似螺螄、性好閉口、故立於門上、今呼「鼓了」非也。蚺蛇其形似龍而小、性好立險、故立於護朽上。鼉魚其形似龍、好吞火、故立於屋脊上。獸吻其形似獅子、性好食陰邪、故立門環上。金吾其似美人首魚、尾有兩翼、其性通靈不睡、故用巡警。出『山海經』、『博物志』。右嘗過倪村民家、見其雜錄中有此、因錄之以備考。如詞曲有「門迎四馬車、戶列八椒圖」之句、八椒圖、人皆不能曉、今觀椒圖之名義、亦有出也。然考『山海經』、『博物志』、皆無之。『山海經』原缺十四、十五卷。聞『博物志』自有全本、於今書坊本不同。豈記此者嘗得見全書歟？⁴⁸⁾

この陸容の記述によれば、それらの怪獣はただ「形似龍」なだけで、龍ではなかった。筆者の短見ではあるが、龍の息子とされているそれらの怪獣は、かなり以前の時代にも他の伝説として、すでに存在していたものであり、漢唐以降の龍の認識の普遍性の高まりとともに、このような怪獣もしばしば「龍」と認識され、後に龍と血縁的な関係があると想像され、やがて龍の息子となったと考えられる。

このような龍についての認識が変容する事例は他にも多数あると想定される。先行研究にもそのような研究者のイメージによって龍が変容することが見られる。従来の龍の研究では、今

47) 『天祿識餘』「龍種」。

48) 『菽園雜記』第二卷。

日我々がイメージする龍の姿を前提として、それを無作為に古代の龍にも適応されるという立場をとってきた。逆に言えば、今日の我々のイメージから見て龍と思えるものを、古代においても龍と見なされていたと信じて考えてきたのであり、果たしてそれが古代において本当に龍と認識されていたのかどうかについては考察されなかった。また、われわれの感覚で龍には見えないものの中にも、当時は龍とみなされたものが存在した可能性も考慮されていない。つまり何を龍と見なすのかは、研究者のイメージのみによって左右されてきたのである。

おわりに

先行研究の問題点について、簡潔にまとめると、まずは、すべての「龍」における時代と地域の差異を回避して同一視してしまうことがある。ついで、文献史料と図像資料の関連性を考慮せず、安易に結合させることがある。最後に、以上の諸問題が生じる根源でもあるが、現在一般的に浸透している龍文化をそのまま受け入れ、歴史的な事実を考察せず研究を進めることが問題であろう。龍の研究を進めるには、まずは上記の問題の解決が先決であると考えられる。また、漢代以降、龍がどのような過程を経て今日の龍に帰結したのかは、なお残された課題である。この課題は、今日のわれわれが共有する龍のイメージの形成過程を問うことにほかならない。さらに、中国の龍文化は朝鮮・日本など他地域にも伝播受容されたが、それが中国の龍のどの部分を継承しているのかも明らかではない。東アジア諸地域での龍の継受関係とそれぞれの独自性の解明は、逆に中国的龍の特質を把握する上でも、重要な課題である。

上述の新たな課題を探求する上での問題点は、従来の龍研究に欠如していた方法的厳密性をいかにして保持しつつ、複雑な時代の変遷と他地域への伝播を把握するかという点である。それについて、図像資料からのアプローチと文献史料からのアプローチを可能な限り弁別し、両者の安易な接合を回避しなければならないと考えられる。

先行研究を検討した結果、秦漢時代こそが龍のイメージの定着と発展にとって非常に重要な時代であると予想される。その時代は、初めて中国全土の統一が実現され、諸地域の文化の衝突と融合が著しく進んだ時代であった。秦漢時代における龍を研究の基点とすることが妥当であると考えられる。それが今日的な龍に帰結するまでのプロセスを、龍の形と龍の神性の二方面から解明する必要がある。そこではまず、秦漢時代の龍にいたる前史として、先秦期についての考察も一定程度必要となる。先秦期の龍については、図像資料・文献史料ともに恣意的な解釈を回避し、秦漢時代の龍との関連性を第一に考えて整理することが求められる。また、漢以降については、現時点で龍の姿に対するイメージがほぼ固まると予想される元代を一応の下限として、そこにいたるまでの龍の形と性格の変遷を追跡するのは妥当であろう。

また、各時代の龍の具体的姿を伝える最も重要な史料は図像資料であることが見出せる。先秦時代から秦漢時代にかけての龍の図像資料は、青銅器の文様に見られる抽象的なものから、

画像石に描かれる具象的なものまで、いくつかの階層を有している。そして、そこには「定型化」の傾向が見て取れる。図像資料における抽象的なものと具象的なものを弁別し、秦漢時代における具象的な龍の図像を出発点として考察することで、具体的な龍のイメージを把握することが可能になる。併せて、図像に地域の特徴が見いだせるかどうかについても考察を加える必要がある。具体的には、中国の龍について、青銅器、画像石、石刻、壁画、帛画、水墨画、挿図、貴金属の飾りなどさまざまな龍の図像を可能な限り網羅的に収集し、時代・地域の情報を付したデータベースの構築など、図像資料の体系的把握が求められるであろう。これによって、龍のイメージの変遷過程を、時間と空間の両面から追跡することが可能となる。

近年の中国に於ける考古発掘の発展は、こうしたデータベース構築を可能にするだけの材料をもたらしている。それに、朝鮮・日本などの東アジア諸地域においても、龍の図像は多数遺されており、可能であれば朝鮮・日本の文献史料の収集も併せて進めるものとし、このデータベースも合わせ構築して中国との比較を行う。これにより、東アジアにおける龍文化研究の基礎を形成することも視野に入ってくるだろう。朝鮮半島や日本に伝わった龍文化は、中国で展開した龍文化のうち、ある特定の時点以降のものであると考えられ、いつ、どのような要素が伝播したのかを推定することは、中国の龍との比較によって可能となるであろう。またこうした地域で、中国の龍文化とは異なる独自の要素が見られるか否か、あるとすればそれはどの時点でどのように出現するか、といった課題も探求の視野のなかに入ってくる。すなわち、龍文化の地域差を解明することによって、東アジア各地の龍文化に対する受容と変容の実相にアプローチすることが可能となるであろう。

一方、龍の属性すなわち龍が何を象徴するかについては、漢代に出現した新しい思想がそれに影響を与えたことが想定されるが、同時に先秦文献に見られる「多様性」も解消・整理されないままに維持されていると予想される。そこで、文献史料からその事例を収集して、いくつかの要素に類型化して整理する必要がある。その際には、文献の成立年代を考慮しつつ、時代的変遷の存否についても考察を加えることで、龍文化の時代性の把握が可能になる。また、文献に見られる龍の神性はきわめて多様性に富むが、後世まで大きな影響を与え続けた文献として『山海経』と『論衡』龍虚篇がある。この二つの文献における龍に関わる言説を詳細に検討し、その由来とその後の継承を跡づけ、これを基礎として、類書の記載なども用いながら、元代を一応の下限とする龍の神性を系譜化することもできると予想される。

その上で、今日の龍への帰結がどのように生じたかを追跡することが可能になる。また多様な龍の神性については、文献史料の時代性を踏まえながら類型化し、整理して、今日の龍に込められた意味を歴史的に解明することも想定される。また、東アジア諸地域の龍についても、中国の龍との対比を念頭に、同様の方法による整理を行う必要があると考えられる。